電子複写不可

伊江島守備隊

防衛研究所図書館

沖縄
401

伊江島守備隊

序

この文書は三五頁の通り無電機が敵弾のため破壊されたことを知り、井川大隊長は軍司令部に最後の電文を準備していたがそれもできない、井川大隊長は部隊の悲壮なる奮闘を誰にも伝えられなくなった。部隊長として莞爾として死んで行く部下の心境を思いやり砲声韻々たる壕の入り口で児玉軍医に向かい最後の突撃後若しできれば本部半島に渡り聯隊長に戦闘経過の報告するよう話した。

昭和二十年四月二十三日午前三時井川大隊長と諸江大尉は二隊に分れて学校前の敵陣に突入した井川大隊長は左上膊、左胸部に敵弾を受け今はこれまでと武人の最期を従容として自決した。児玉軍医は戦後別府市に復員し「伊江島守備隊」を草稿し井川義子夫人に渡したものであり、五十九年伊江島戦跡巡拝に同行した際この話を聞きこの写をお願いした処ご提供頂いたのであります

昭和六十年十二月四日

社団法人隊友会大分県連　（〇九七五―三七―〇〇三七）
事務局長　羽田野　正一

井川義子夫人ご住所
大分県中津市中央町一丁目一〇―五〇
坂山正年様方（長女　成子様方）
電話〇九七九―二二―六六五六

井川部隊　詳しくは独立混成第四旅団第二歩兵隊第一大隊、
昭和十九年九月五日沖縄群島警備部隊名護に於て編成さる。其の根幹をなすは大分、熊本、宮崎、鹿児島四県出身の将兵約三百五十名にして、之に加ふるに現地召集の兵約三百名を以てす。
大隊長陸軍少佐井川正は大分県の人年三十九才。（大分県宇佐市出身）
編成当時名護地区以北の防衛を担当。九月十九日より十月三日の間、伊江島飛行場設定のため伊江島に進駐、十月四日名護帰隊
十月七日本部半島（モトブ）に桃山（ヨシヤマ）眞部隊、崎本部地区防衛の新任務を受け桃山眞部隊、崎本部地区に進駐す。十月十日第一次南西空襲を受く、部隊の人員材料に損害なし。即日全部隊を近の部山、建堅高地に配備し陣地構築作業に専念す。十月三十七日各陣地共に完成し漸く平静に帰す。

正に近いために、此の日夜半、突如として伊江島進駐の命到る。

十二月八日、伊江島進駐開始さる。此の日前日来の雨は積雲まりなれども、海上は南荒北で「ローラー」（環礁）に吼ゆる波濤は物凄く、運命の島伊江島へ行く將士の気持を象徴する如くであった。

伊江島は本部半島の美瀬岬を西に隔たる事四粁、東西八粁、南北一粁の大約楕円形の小島にて、東部の中央に宛然置物の如くに裸の岩山が一つある、標高約二百米、村民は京を一つの信仰として朝夕に仰いでゐる、伊江城山（ぐすくやま）即ち之れなり。

此の岡の外は全島は一帯な一平地で、汎く耕されてゐる。海上より島を望めば全く一大航空母艦の如き貌を呈する。島の北岸一帯は数十米の珊瑚礁の断崖が連り、その絶壁上の高地は見渡す限り芋畑が續き、紺碧の海は洋々の環礁に波立つて、南海の孤島らしい風景を呈してゐる。城山の南麓一帯に部落あり戸数約二千、人口七千五百。全島は何処でも地下約一米に到れば堅い珊瑚礁が現れるは拘らず、甘藷、野菜は一年中豊かで、近海漁業と併せて島民は安楽な日を送つてゐた。昭和十九年早春以来陸軍飛行場大隊が駐屯して此処に飛行場を設定してゐた。

我が部隊は伊江島到着と同時に、既に数日前より駐屯してゐた独立速射砲隊（計機関銃の各一ケ中隊、約二百名）の指揮下に入り、直に陣地構築に着手した。此の手垣にして毒蛇も棲まない小島に於て、予想される敵の強烈な砲撃は、遂に我が銃砲乃至十数倍であるべき敵軍を撃退するには地下の堅固な陣地に據るの外なし。

將校も兵も全員、珊瑚礁の山、珊瑚礁の土地に向つて夜も晝もなく戦争を續けた。資材難は我々を苦しめた。近代的機械は勿論なく、火薬も勿論、鶴嘴も煙硝も常に不足であった。

冬の夜半に起きて行く兵隊の足音に住民は深い同情の言葉を漏した。然し我々には其時既に無理とか、過労とか言つてゐる餘裕はなかった。

に拘らず我々の期待の如くには進展しなからしく、年末頃からは「クロバンビ」を基地とする B24 が頻りに我々の上を偵察し始めた。南西諸島海域に於ける敵潜水艦の跳梁は益々猛しさを加へ、日本輸送船撃沈の報は相次ぐ耳に入った。

「ルソン」に於ける敵軍優勢の報到る頃よりは敵機の来襲は益々頻繁となり、益々敵の攻撃作戦地が南西諸島に迫るの気配が濃厚となって来た。一月二十二日には敵機初部隊による猛爆が伊江島の飛行場及び部落全般に加へられて学校を始め殆ど全戸が全壊し、即砲隊長第地中尉の負傷者も一弾の直撃にて中尉は顔面、胸部に負傷した。同移の猛爆は三月一日にも行はれ、民家は次々に焼けて行き、各戸を取囲む福樹の濃緑は見る見る赤茶色に変り明和三十年の冬は沖縄に珍しく寒い冬で、雪が多かった。此の寒い中に兵隊は陣地構築の合間々々を肉攻、斬込みの猛訓練に励んだ。

何の操作もなく、此の離島に数々の困苦を舐めねばならぬ兵は只管作業励みて不平を漏す者なく、誰もなげくこと

それは井川部隊長を始めとして將兵が一致團結、全員が皆同じ苦を味はい励まし合ひ、慰め合って居たからである。

將校は殆んど大部分が予備役召集の將校で、世の酸も甘いも充分に味はって来た四十才以上の人が多かった。部隊長も將校も兵と共に石拾と泥煙にまみれて塹壕掘りに汗を流してゐた。

井川部隊長は支那事変の勇將で、胸間に輝く金鵄と負傷による独特の豪傑風の歩き振りは、一見畏怖の感を抱かせるが、実は人情部隊長として兵隊は勿論、住民からも敬愛を一身に受けてゐた。

アノモンハン戦の勇猛中隊長で鋭利な日本刀の如く冴え渡る頭脳を以て部隊長を輔け、部隊を引締めて居た。

副官（諸方中尉）は典型的英傑武士で、卓越せる戦術眼、剛毅併せ行はれ高潔な人格は將兵の信頼の徳望の的であった。

一部隊長を頭として此の三人が一身同体となり、最後迄部隊をカッチリと握って寸毫の揺ぎも見せなかった。

二月中旬、遂に公式に大作戰（天號作戰）の発令があつ、沖縄が戰場となる公算は益〻濃厚とした。それを裏書きする如く、敵機の偵察は益〻頻繁となり、渡久地に到る八重の海峡の書間航行すら危険になつた。夜になれば近海に類りに探照信号が望見された。住民の本部方面への疎開が軍により提唱され、学童、老幼が続み別れた故郷を後に海峡を渡て行つた。

将兵の顔には緊張と決意の色が一日一日と強く刻まれて行つた。

多くの将兵が故郷の母に父に妻に、それとなく別離の手紙を書き送つた。全員が、此の孤島を墳墓の地とする覚悟を堅めた。何故なれば此の伊江島は此の伊江島飛行場の軍事的に最も敵の目を惹く存在であり、又其の地勢は餘りにも守備に難く、守備軍はその数に於ても、その装備に於ても、優秀装備を誇る米敵を敵とするには餘りにも貧弱である事を皆よく知り抜いて居たのである。唯、部隊長日頃の訓示の如く、全員生死を論ずる事なく、全力を盡して、一人でも多くの敵兵を、一台でも多くの戰車を撃破し、一日でも長く此の飛行場を敵手から守ること

假令、我々は城山の露に屍を曝しても、それに手沖縄本島に於ける友軍の戰況に想を馳せんと祈念した。

四月十一日の建国祭には雨の中で全員角力と演藝にうを打興じたが、誰もそれが此の世に於ける最後の團樂となるであろうと言う一抹の哀愁を胸に抱いつゝ。翌の如く翌十二日より敵の猛力機動部隊の偵報が入り、其の進路が南西諸島に指向されて、沖縄上陸の尊大なりとの軍参謀情報に全員緊張す。各種の戰闘準備が行はれ、十五日夜には隊長會同が召集されて、種〻の打合せがなされたが、其の席上、敵軍の硫黄島上陸の報が齎らされた。

硫黄島上陸の報に次ぐ非常に悲なる最後の報を聞き、兵の達は作業に訓練に一層精進した。

三月中旬の或る日、春うらゝ長閑な日影が漸く西の洋に傾かんとする頃、聯隊長宮古大佐（長崎縣）が本部半島の山中から海峡を渡て來、我が部隊を訪ねられた。我々は子供が久し振りで父親に會ふ様な氣持でお迎へしたが、聯隊長は敵の破壊が

に何人も知れぬ緊迫した情勢下、部下を激励し、同時にそれとはて別れを告げに来たものと解釈された。「任務上諸子と同じ戦場で戦う事の出来ないのは隊長が深く遺憾とする所であるが、大隊長を中心として敢闘せよ、必勝の信念は決死の覚悟より生ずるものなる事を銘記せよ」其の夜特務隊員は隊長を取巻いて気炎を上げた。

三月上旬、情勢の緊迫に應じて防衛召集が行はれ、四十才迄の沖縄婦人が召されて伊江島にも配置された。その約八百、続いて伊江島守備隊は我が井川部隊、約一百の三部隊より、各守備地域が決定された。即ち我が部隊は東飛行場以東、田村部隊は飛行場地区、防衛隊は「山」に「マジヤ」一作の地区を夫々担当守備する事になる。然し井川部隊を除く他の二部隊は非常に貧弱にて、小銃も軽機関銃も少く、手榴弾と爆薬造箱爆雷、それに信じられぬ程であるが竹槍がその武器であった。

三月上旬の某日、晴天の碧潮の如く飛行場破壊命令が飛行場大隊に下達された

比島に於ける失敗に懲みて近代的立体飛行場を目指して着工以来満一ヶ年、昼夜強行で完成も目前に迫り、特攻の一戦隊も来島するとの噂に兵も民も期待していた際、自ら之を徹底的に破壊せよとは軍最高部の如何なる意図に基づくかは一吾々の想像の外にあるが、作戦上伊江島飛行場を必要としなくなったのか、或は伊江島守備の困難性を認めその撤退か、或は伊江島飛行場を敵に渡さぬ為の破壊作業を開始した。

同じて建設に当らぬ困難な破壊作業は各中隊共勿論我が部隊の陣地構築作業は各中隊共勿論我が部隊の陣地構築作業は各中隊共勿論我が部落一体は二連の地下壕壕と化した観あり、千数百の地下に数十米の壕が縦横に連った。作業の合間々々に五、六連は黙々と造っていた。

車の下に飛込むべき爆雷を五、六連は軍の督促により住民の疎開避難は拍車をかけ、約三千名が敵機を避けて暗夜の海峡を渡る。毎日の様に B29 が偵察に来る、破壊された飛行場の上を低空で旋回する。

沖縄の三月はもう全く春だ。内地の四月末位の暖かさで、鶯や鶏が啼き囀って、その実を含むに来た。人間の世に無頓着に自然は長閑な春であった。

此の長閑な春の静寂を破って凄惨な死闘が突如として展開されたのは三月三十二日である。此の日朝からの曇天は時折り小雨を降らしてゐた。午前八時頃空襲警戒あり乙号戦備が下令された。然し空襲警報は既に度々あり、此の度も毎度の空襲と同じに考へてゐた。唯数日前に敵有力機動部隊が九州四国方面を襲撃して後、南下しつゝありとの情報があり、或は之が敵中堀作戦の牽制に非ずやとの僅かの予感は誰も抱いてゐた。三月三日に引続き二十四日も朝来空襲警報が繰返された。是迄連日の空襲は一度もなかった事であり、然も二十四日の空襲は執拗極め、主として部落を焼掃する如くに見えた。これは少し変だなと思ってゐる時、敵艦が島尻郡港川を艦砲射撃してゐるとの情報が入り、続いて午前十時の一部が慶良間に上陸したとの報せがあった。

各自の身辺整理を完了した。一翌二十五日も遂に敵上陸に備える甲號戦備が発令された。此の日始めて我々の目に敵艦が見え始めた。即ち伊江城山より見える南方海上には大小の敵艦が浮び、伊江島周辺にも重巡、駆逐艦等十数隻が遊戯し始めた。南方洋上の敵艦は刻一刻其の数を増しやがて見渡す限りの水平線上に島影の如き戦艦、巡洋艦が舷を相磨さんばかりに犇き合った。午前から光芒一閃又一閃耳を聾する艦砲射撃の音が静寂な空気をゆすぶって轟き始めた。浅瀬岬の彼方、嘉手納方面を撃ちまくるらしい。

二十六日も敵機は島の上空を舞って銃撃を加へる。然も午前から遂に敵の艦砲射撃が伊江島にも加へられた。飛行場、部落、城山附近と到る處々盲滅法に撃ちまくる。満月の西に傾く頃、我々の壕は予想以上に堅固であるが、直撃を受けた処もあるも損害は皆無であった。然しこの艦砲と爆撃とにより部落の大半は破

壊し、焼き拂はれた。家を失い敵弾下に曝された四十余の住民は軍の壕や海岸の自然洞穴中へ避難した。二十八日午前四時全員の集合が命ぜられ、東天のほのかに明るむ方を拝しつつ、「天一號作戰は皇國安危の決する……」と云う聖旨並に参謀長の激勵の詞を拝受した。

夜が明けるや否や、敵機は日課の如く二百中島の上空を旋回し、何でも変ったものを見付けると直ちに掃射爆撃する。

敵艦は日毎にその數を増し、孫に残波岬方面の海上は敵艦をもって埋まる有様である。伊江島より肉眼にて認め得る巡洋艦以上の巨艦は常に六七十隻に達している。よくも之程持って来たものと呆れるばかりである。之が帝国海軍であったらと切歯扼腕の嘆息した。此の敵艦群は長い光閃を次々に放って嘉手納方面を目指し驀進する。その音は晴れ渡った秋空の天地を揺がし續けた。敵の上陸開始の報は来ない。敵は恐るべき強力さを以て準備戰に取掛っている事が推察される。名護岳での大損害に懲りて

徹底的な艦砲射撃を行っているのであろう。それにしても敵未だ襲来に至らず唯一機の友軍機も我々の目には映らず、聯合艦隊出動の報もなく、暗夜の南方海上に物凄い防空砲火を見たのみである。又夜になれば暗夜の月明の海上を白航跡を引き「エンジンの音も高く友軍の㊤(水上特攻)と思はれるものが小數宛や部隊方面より伊江島の上空を通って南方に消え行くのが認められた。晝間見た敵艦船の豪勢さに比して、それは餘りにも微力に思はれたが、それ丈けに又悲壮さが増して、見送る我々の胸に熱いものがこみ上げた。

敵沖縄来襲の折は、その艦船の大半を海上に於て葬るであろうと聞かされた。軍前の話は何時実現するのであろうか。

四月一日遂に敵は一部を以て濱川方面に欺陽動を行い、大嘉手納(チャタン)北谷の正面に上陸を開始した。その前日来両方面に炎々たる艦砲射撃の猛烈さは正に言語に絶するものであった。遥に望む浮島の彼方は飛上る土砂と、驚くなる煙に覆んでおた

斯くて伊江島は我々の予想に反して、敵の第一次上陸から取残された。上陸軍が南北に分れて進み、それを邀へる友軍との戦況を毎日壕の中で聞いた。一日毎に壕中生活にも馴れて来た。今迄の不足勝の給與に比して、豚、鶏、鶏卵が毎日一人の胚、豆の食糧を満足させた。晝間は常に上空に敵機が舞い、夜になれば島の周囲の敵艦から砲弾が飛んで来るので、一歩壕の外へ出れば何時でも生命の保証は出来ないが、壕の中から先ず安全である。敵の伊江島上陸は時の問題である。敵を前にして線も一も終に最後の準備をした。一陣地の仕上げ、武器弾薬の整備、そのから米に於て居住治で健康を害さぬ様に細心の配慮が払はれた。最後の賞品は飲に誰も出来てゐる。誰もそれを食更問題にする者はなかった。三月三十日の夕方、井川部隊長を取巻いて本部の全員と各隊の一部の者が食を催した事がある。伊江城山中腹にあり、戦闘指揮所前の鉢面で、松も組は座として眼前に迫る敵艦にも、時折り過ぎて来る敵機にも見えない。然し誰もそれを恐れる者は居ない

微醺を帯びた部隊長は得意の安来節を踊り、続方副官大番の黄金虫を舞った。時笑が皆の腹の底から湧いて意氣は飽に敵を呑んだ。深松軍曹は松のひり株に片脚を掛けて眼前の敵艦に小手打ちかざし「ヤア（遠からん者は音にも聞け、近くは寄って目にも見よ、我こそは……」と素晴らしい太い声で呼び掛けた。

「五條の訓謹みて、戦野に屍曝すとも武人の貴信かねてより、一髪土に残さず」

「喪に何の悔やある……」　福山主計中尉（愛知県）について全員の歌が戦陣訓の歌声が、次第に漸く濃くなった伊江城山腹から茜色に暮れ行かんとする夕闇の中に消えて行った。

四月三日夕方待ちに待った友軍の特攻機が来た。物凄い弾幕の中を旋回しつゝ、次々に突入んで行くのが手に取る如く見える。敵艦は退避運動を行ふが忽ちにして北方海上で駆逐艦らしきもの四隻が黒煙を上げ、南方では駆逐艦一隻、輜重他二隻の黒煙を認めた。

然し我々の目前で友軍機二機が敵戦闘機に取巻かれ火を吹きつゝ流星の如く

峡に落ちて行くのを兵達は地団太を踏んで口惜しがった。其夜兵達は重囲の特攻隊の壮烈を語り、俺達ももう何時死んでも心残りはないと語り合った。情報によれば嘉手納に上陸した敵軍は余れて南北に進み、北は既に名護に迫り、南は中城村津覇に到ったらしい。大隊の高級軍医・嘉中尉は津覇にある自分の家が今頃は敵の砲火を浴びているだろうとつぶやいた。妻子を戦場に残して離島に戦う沖縄出身軍人の心情を察して、誰も慰める言葉もなかった。

敵艦は日一日と伊江島に接近し、掃海艦は毎日の様に島の周囲を掃海した。度々地海峡に入って来た。高射砲も重砲も持たぬ我々は、飛行機や軍艦には手も足も出ない。西海岸燈台附近に分遣されていた小隊の口惜しさに、接岸した敵艦に狙撃銃を放った。敵艦からも機関銃で応射して来た。敵も可笑しかったのであろう。

四月八日午後五時、島の上空を旋回していた B24 二機が島の東部墓地に爆弾に

落した。その一弾が一中隊・松岡伍長の卒いる一ヶ分隊が陣地にしていた墓地に直下し、折から夕食中の隊員を埋めた。報により吉岡中隊長（熊本県）結城副官・兄玉軍医等が急遽駆せつけ、敵機下で必死の掘出しを行った。八名を救出したが松岡伍長（熊本県）以下四名は遂に無惨な戦死を遂げた。我が部隊最初の尊い犠牲であった。

情報によれば敵は名護を突破し、伊豆味を衝き、我が聯隊本部を背後より迫る気勢を示した。四月十日聯隊長より大隊長へ「急眼下に敵を見る」との電話あり、敵艦は度々地海峡に入って盛に近部山を射ち始めた。戦況を氣使って聯隊本部に対し幾度も〈情況問合せの無電を打ったが本部から感度はなかった。斯て遂に我が部隊と聯隊本部との連絡は全く途絶してしまったのである。

ラジオによる大本営発表によれば沖縄周辺に群る夥しい敵艦隊の数は五百隻に及び、我が陸海特攻隊は全力を挙げて撃滅に努めつゝあるとして、聯合艦隊も遂に出動したらしい。四月十四日頃迄の敵艦撃沈の損害は計四百隻に達するとの事、

その為めかすかに、伊江島より望見される敵艦船数は幾分減じた様である。

近づくに伊江島周辺に群がる敵艦艇の数は十日頃より漸次増加し、既に島の南西は全く掃海されて消え、敵艦は殆ど接近し、四月十三日頃には北納島に設置艦が碇泊したらしい様子である。一日中二十度乃至三十度が接近してゐる。十四日には戦艦及び巡洋艦を含む二十余隻が取巻いてゐたが、正午過ぎ、その戦艦の放つた巨砲弾は城山中腹にある第一機関銃中隊の掩身壕に直撃して、元田伍長を始めとし、その他の指揮官、兵部の多くがその救出に当たったが、其の必死の救出作業は敵より丸見えの為であり、盛に射撃を加へるので作業は困難を極めた。遂に残った中隊長満留中尉（宮崎県）以下十三、四名が辛うじて自力で脱出したが中には堂屋小尉（宮崎県）以下五名の安否は不明である。

大部分は死亡を遂げたらしいが、一部の生存者ある見込みで危険を冒して救出作業を行ふ事四時間に及んだが、艦砲射撃が益々激しくなるので止むなく一時中止せざるを得なかった。此の作業中に今度は城山の西側中腹にある第五機関銃中隊の

壕に命中の様子で、五百瓩爆弾が直撃して、巨石で出来た強固な壕を圧しつぶした。

巨大な岩盤が落下して救出は到底不可能であり、中に居た分隊長以下約三十名の安否は、四名の女子救護班員は恐らく即死せるものと思はれた。

其夜再び第一機関銃中隊の救出が行はれ、堂屋や尉以下五名が負傷のため遂に事救出され、河野伍長等の死体が発掘された。更に翌十五日朝最後の二名が救出された。殆んど三日間生埋になってゐたのである。

翌十三日朝来伊江島周辺の敵艦は戦艦三隻巡洋艦七、八隻、駆逐艦、飛行機、城山部落と殆んど来ぬ間を取巻いて物凄い砲撃を開始した。敵弾は海岸線、飛行場、城山部落と殆んど来ぬ間はない有様である。殊にその日の弾は口径が大きい為めか、今迄の砲撃ではビクもしなかった谷間壕が一日中揺らぎ続けた。敵砲艦の射出する「ロケット」弾は一秒十数発の発射速度で為調子の太鼓を打つ様に轟々と響けた。百雷が一時に落ちるとは正にこの傷な事であらうかと思はれる物凄さで、此の艦砲射撃は十五日日中

壊れた。夕方辛く壊滅して仰ぎ見る伊江城山は何時の間にか全く別の山の様になってゐた。山頂より村落に到る木と言う木は一本も剥ぎ取られ吹飛んで、岩は崩れ落ち、土塊は飛び散り、到る処に弾痕が大きな口を開けてゐた。此上の施設は跡方なく吹き飛んで、各部隊各隊間の有線連絡は絶へた。見下す部落も見渡す限りの廃墟と変り果てた。

此の砲撃は只事でない。愈敵の上陸は今明日に迫ったものと推算され、それに備へる各種の命令が各隊へ傳へられた。燈台丘山に分遣中の各三分隊は防衛陣に復帰し、紙いで引揚げて来た。

明れば四月十六日、此の日拂暁より前日に優る猛烈な艦砲射撃が始まった。

から一歩も出られない。祖無茶苦茶に射って来る。晴天である筈の空はそれ嘘の様に黄色に霞んでゐた。午前八時頃田村部隊より下士官が弾薬の命令を受けて戦闘指揮所へ馳せ付けた。其の報告によれば、敵は十六日拂暁より中飛行場南部附近の山山海岸より上陸を開始した。拂暁より猛烈艦砲で田村部隊も防衛陣

も壊かう出られなかったが、妙なエンヤンの音が聞えるので、見ると敵戦車は既に壕前に迫り、一部は中飛行場附近にも進出してゐるのを認めた。模様である。或る壕の中さは気の付いた時は既に壕の上に敵兵が馬乗りとなり、手榴弾を投げんで来たらしい。田村部隊の勇士小尉は早皇迫と小隊を率ゐて敢然壕より躍り出て戦闘を交へたが、為ち全員此処に戦死を遂げたりと。

敵上陸の報を持って傳令は各陣へ飛んだ。直に兵は陣地に付いた。最早や我々は田村部隊や防衛隊の蹴を踏まんぞ。井川部隊長、猪方副官、作戦主任詰江大尉の三人は修羅場を作戦を練る。落着き拂った舎治が聞へる。「生死、勝敗は問題でない。唯死んで悔のない面白い戦争をやろう」と部隊長は髭を撫でつつ、莫爾と微笑む。

各隊より傳令が帰り、各中小隊長以下張切った各隊の情況が報告された。午後一時過ぎ城山南麓の敵速陣地より敵中型戦車四輌が城山西方一粁辺に出現して東進中との報告あり、次に之れに蹂躙する如くに城山西方七百米辺に近接せ

戦車四輌のうち三輌は我が独逸の的確なる射撃により瞬く間に擱坐、他の一輌は焼てい
るかんとして、我の敷設したる小機雷に引掛り、飛び散るとの快報が入る。其後も其方面
には隠伊第五を伴ふ戦車十到輌が現れたが恐れをなして速射砲の有効射程内には入う
ず、南北に移動して我を警戒するの外、島の周辺は敵艦で取巻かれてゐる。上陸敵
軍の詳細は不明なるも約三、四千視及と推察した。　戦況は漸く募れて行
った、其の夜上陸軍の評細を偵察する為め、斬隊橋本支隊（　）を長とする將校斥候
が山山方面へ発せられ、同時に各隊四組乃至七組、計約二十組の最初の刺込隊が戦友に別
れを告げて、旧暦七日頃の上弦の月ほのかに照らす夜の野へ出て行った。

四月十七日、晴天、敵機は夜の明けぬうちから頻りに飛ぶ。敵は昨日水線島（ミンナ）
砲台を陽動したらしく、朝来艦砲と合せて雨の如く城山地区へ射込んで来る。早朝田村部隊
の將校斥候、下士官、兵到着者が我が戦闘指揮所の近くに来た。その話によれば田村大尉
は、その壕が十六日敵に焼かれたので、その夜脱出して敵の包囲下に陥ち入ったとの由

田村部隊は防衛隊と共に後要を朝近隊を出して奮戦しているらしい。昨夜の我が刺込隊
は帰って来た。其の報告によれば、大部分の飛行場迄に到り、約半数は撃破に成功し、戦
車及び募合に爆雷を投じた。各隊共爆雷を抱いて戦車に飛込み、戦車と共に華々しく
四散した。約名の下士官、兵が報告に来た。等確認された敵果、敵車七輌、擱坐、
募合二、破壊。　我方又相当の未帰還者を出した。　山山方面へ出た移動部隊
は敵中深く潜入して偵察中、遂に敵の重囲に陥り、移動部隊は重傷を受け、恐
らく戦死せるものと思はれるとの報告が来た。
敵は山山海岸、中小飛行場附近に募合を張り、飛行機に候敵哨戒を厳重にし、その数
約三千名と。　午前十時頃迄に大型輸送船約七十隻を中心とした敵の大船団
が屋久島南岸の海上に群がって来た。　やがて其の船から数へ切れぬ程の上陸用舟
艇、水陸両用戦車等が出て来た。艦砲射撃は更に熾烈を極め、その砲煙の中に
敵が好機を狙って旧海岸線迄に至る南岸一帯に新しい上陸を開始するのが望見された。

その船舶の勝しさを眺めて、歴戦意氣の緒方副官も流石に言葉を飲んだ。水納島を中心とした海面は全く船影で埋まってゐるのだ。港口は正面五浬幅ゐる三中隊より報告に成ば、敵は兵員及び飛行場設定機材しきものを揚げつゝあり、兵員は約六千名と推算する故、三中隊及び第一機関銃の中全、吉見両大尉指揮の小隊は陣地に據って之を攻撃するつもり、敵兵の撃滅するが手に取るやうに、痛快な戦闘をしてゐると。

井川部隊長及び緒方副官は弾雨下を指揮所へ来た諸兵大尉と兵に対し三千名の間、敵の態勢未だ整はざる今夜半を期して、全部隊の三分の二の兵力を以て此の新手の敵に対し夜襲を敢行、之れを海中へ撃滅する事に決定、兵達は早つて死ぬよりは、攻撃して華にしく散る事を願ってゐたので、此の命令を聞いて勇んだ。一機中隊長橋爪中尉（故戦死）は流ぎの工手なる「ボート」名を選出して今夜水雷艇へ漕ぎ渡り、其の砲を爆破せん事を大隊長に報告し、諸兵大尉の支持を得て爆雷と

タイヤを持ち去って行った。敵戦を辞ぶ城山西方へ来て居るが其位を徘徊して近寄らない。部隊の重火器の大部分は西方に向けられてゐるので、敵が西方面より来るは我の思ふ壺であるが、敵は昨日の痛打に懲りて敢て近付かない。午後四時頃三中隊より戦死を傷つけられた橋爪少尉は負傷せるも元気で兵隊を助けられて無事脱出帰隊せりと の知らせが来た。夕方頃には敵の斥候が部落西端方面に出没して来た。其夜淡い人影が三四五人、黙々として靴音もしのびやかに城山の黒い影の中から西方へ散って行った。其の後間は緑の三角巾で包まれて淡い月光の反射すら防がんとし軍刀の柄を巻いてゐる白繃帯も取り除かれてゐた。今は甚だの木蔭に此の暗闇に敵影隠れが潜んでゐるかも知れないのだ。兵達の交す「神」「風」の合言葉も低い。時折り砲弾の落下する中を兵隊の間を縫ふ攻撃準備に夫々各国に急いだ。部隊長は副官以下本部を率ゐて新港地を眼下に見る丘陵高地に據った。此処、兵隊達の幸ある御健闘を祈る。本部は前線近く編成所を開設した。一弦の月漸く西山に傾いた十八日午前二時頃より

各隊一斉に銃火を開いた。主機を主とした、豆玉砲弾の雨は鋭い銃声が暗夜の静寂を破った。我が攻撃主力は新城北端に向けられた。我が五連隊に殺到した敵は駆逐戦車をもって来たが、間もなく沼地にあゆる火器を射撃された。野砲、迫撃砲、重機関銃の猛砲が一斉に我に向って火を吐き始めた。弾に我が重機陸地には敵艦砲弾が雨下し、戦闘は一時暫にしてその二銃は破壊され、十二名が負傷した。繃帯所へ運ばれた。その四名は戦死を遂げた。戦闘は益激しく継続せられたが、敵の猛弾雨は我には近寄の平地へ近寄る事も許さなかった。然る敵戦車は暗夜を利して我が陣地を追し、砲銃撃を加えた。これに対し我が肉攻も小路の本蔭から飛出て爆薬を投げ、その二輌を破壊した。そのうち第天ほのかに白む頃となったので、部隊長は全員に攻撃を中止、引上げを命じた。此の夜部隊より我に高級の賞状の外、各隊に勲名発の戦死者を出した。敵は相当の損害をうけたに相違ないが、暗夜の事として確認するよしもなかった。

夜が明け、故で、十八日も晴後に好天気であった。昨夜微雨の夜襲戦から疲れて各隊陣地帰った兵達にゆっくりした休養の暇を与えたからである。その主攻正面は三中隊及び一機の予備となる。要塞高地攻撃の為に攻撃を加えて来たからである。敵は午前十時頃から我に対し本帯である。城山西方に見える戦車群は依然近寄ず、進べよう南へ回って部落西端より攻撃の態勢を取り、又北へ進んで城山を北方より迂回するかと北海岸寄りに東進して来た。昨日新たに上陸した敵は主力となって南方より部落及び高地を攻撃し、更に其の一部は南海岸寄りに東進して東海岸方面に進出し、其の一部は城山を攻撃せんとして高野ヶ岳（熊本県）の據れる如く山より東方に連なる墓地の我が陣地正面に突掛けた。その主力は戦車約百輌を主とし、其背後に多数の砲を据へて居る。物凄の銃砲声と硝煙の臭ひが伊江島東半部を蔽ひ包んだ。敵機は低空して地上敵に協力した。友軍は暴露すれば敵機の掃射を受るが、或は敵機の通報により迫撃砲の雨を浴びねばならぬ。と云って壕に引込んで前方から目を離せば地上の敵は戦車を出て一挙に我が陣

地を蹂躙せんとする勢である。一方戦車砲は不幸にも南方に向って居ない。飛行機と戦車を持たぬ軍隊は近代戦に於ては実に惨めな戦闘を強ひられるものだ。敵の主攻正面に立つた平良中隊（沖縄県）の率ゐる三中隊は此の困難の中にあって堂々たる奮戦を繰げ、高地に迫る戦車群を重機と擲弾筒で肉攻で制して高地を固守した。中金吉見両少尉も中隊長の留守を引受けて勇戦した。敵は潮の如く押寄せたが、我が猛攻撃防により進出不能となって退いた。その退いた後へ迫撃砲と聯隊の弾が雨下した。敵の退却に乗じて前進せんとした友軍は此の弾雨に包まれて動けなくなった。此の様な激闘が日中繰返されて我軍は要衝高地を確保した。南東海岸より女山墓地附近に向い戦車約二十輌を以て押寄せた敵に対し、高野少尉は自ら陣頭に立って重機と擲弾筒を以て立ちを防いだ。遮蔽物の少いその辺の防禦は困難を極めたが、責任感の強い既に死を決した小野以下三百名の兵は弾雨下に死闘を強ひた。城山の戦闘指揮所より三名宛を助めて井川部隊長は城山の全員に戦を思った。

D.S.K. No.C 2×35

ヶ後一中隊より傳令あり、北面山麓を突進した敵戦車約十輌は十時過ぎ「ミヤト原」に合流してゐた前田中隊（鹿児島県）指揮の二ヶ分隊及び独機一ヶ分隊と正面に承継した中隊は全力を盡して防戦に努めたが、背後に廻って来た敵歩兵部隊との間に挟撃されて、前田中隊及び部下の大部分が戦死したと報ぜられた。

斯くて激闘に明け、激闘に暮れた十九日は友軍の最戦によりよく敵を抑へてゐた。その夜も偵察、刺込みが出たが、東、西、南三方の敵は既に傾敵警戒網を設置し足音をしのばせて間に寄る微かな物音にも、焼け残った枯木にそよぐ微風の音にすら機銃追撃砲を集注する始末で容易に近寄れなかった。

十九日も晴れて、やはらかな日光が此の著る果て荒涼そのものの新戦場に注いでゐた。敵は早朝より南北に向じく攻撃地点及び女山墓地陣地に対して猛攻を加へて来た。連日の激闘に不眠不休、乾麺包を噛んで奮闘しつゝある兵は、眼は落ち込み頬んでゐるが、列つたる間志せたへて物凄い面相を呈して居る。孫に第三中隊及び一機は敵猛攻の正面に立って

連日連夜の死闘に死傷者続出し、その所用弾薬は欠乏を告げる情況にあった。此の日右三中隊長等大中尉は今日こそその陣地死守の日であると、指揮班員に遥に皇居を遥拝し萬歳を唱して戦に臨んだのである。敵の此の日の砲撃は地上のあらゆる物を掃き去る様に砲弾の雨を戦車の前に立てて進んで来た。三中隊も富野少尉も死力を盡して防戦したが、午前十時頃には敵は遂に少後方地に進出して来た。此の高地より伊江島最後の陣地たる城山複廓陣地迄は僅か三百米にして、我が戦闘指揮所を指顧の目に望み四の諸陣地を眼下に見る要地である。これを敵手に奪はる事は既に我の全滅を意味する。敵遂に少後方地に現れるの報を聞くや独逸隊長諸江大尉は自ら部下を率ゐて学校高地下の平地に進出した。三中隊もこれを掩護してその西に續いた。敵に沖縄これだが三中隊一機の将兵は四周を敵に包まれながら、尚その陣地を死守してゐた。彼我の巨離は学校高地迄と僅か三四米に迫ぎない。敵も後方からの砲撃は不能となり。我が指揮を遮らんとして城山方面に砲弾を集注した。この隙に諸江大尉を先頭に我は高地の北斜面に取附き、戦

砲の際長で手榴弾を高地上の敵に投げつけた。敵は此の我が決死の攻撃に怯れて遂に高地上より退いた。その退去後、今迄は砲弾の雨が降って来た。平良中尉はこの砲弾の雨の中に遂に名誉の戦死を遂げた。報告より続々副官は諸江大尉の命を気づかって単身高地に馳せ付け、大尉と共に手榴弾を投げ込んだ。此の時高地と女山の間の道より進出して来た敵戦車の射撃を受けて、その一弾は諸江大尉の左下腿に命中した。鮮血に染まつつ、尚指揮を執りつづけたが到頭遂に後退した。

大隊長は永徳少尉（鹿児島縣）指揮の大隊予備隊及び生毒少尉（熊本縣）指揮の大隊砲部隊に対する後女山陣地の救援増強を命じた。後退して来た田村部隊の将兵もこの戦闘に加はった。戦闘は甚夜十時に到る迄継続され、独逸の力闘により奪回した高地一帯は敵が手に確保されたのである。

他方東海岸を迂回し、墓地の北方を通過して西進した敵戦車約十輌は城山にある一中隊と西に臨む飛行場の一ヶ中隊を以て防戦した。

方面（鹿児島）指揮の二ヶ中隊を以て陣地に拠って防戦した。

此の日朝、塹山戦闘指揮所附近は敵の砲弾の雨の中に煙つてゐた。敵の発煙弾が飛込んで、壕の中は蒙々たる白煙が立ちこめ、煙硝の臭が鼻を衝いた。中に大弾が盛に壕に這入つて来た。壕の入口の岩石が崩れ落ちる。兵達は多少動揺した、敵が壕の上に高歌するのを聞いたのである。各個に手榴弾を握り締め、鉢巻の紐を締め直した。「早く脱出せぬと壕ぬけで犬死するぞ、早く出よ」と呼ぶ者がある。その時井川部隊長は朝食の膳に向つて居たが、箸を早める事もなく、静に食べ終へた後、例の大い声で兵達を制した。「皆何を慌てるか、既に生死を超越した者は何事が起らうと驚く事はないではないか。然も俺の考へる所、敵は未だ充分近く来る筈はない、諸方副官情況を見よ」壕の入口に立つて居た副官はやがて手榴弾の炸裂する閃光を認め、友軍が負傷してゐる事を報告した。兵達は漸く平静に返り始めた。此の時壕の中から朗々たる福山主計中尉の歌声が聞えて来た。「……戰火交ふる幾星霜、七度輝く感状の、勳の蔭に涙あり、嗚呼今は亡き武士の、笑つて死んだ其の心……」兵達が何時となく之に和して口ず

さみ始めた。壕の外には依然として言語を絶する弾雨が我々の壕に注いでゐたが、壕の内には最早何の動揺もなく、此の部隊長井川少佐の大喝に続いて大喝の歌声のみが続いた。「知らぬ間に」で最後を頼む無電機が破壊されて了つた。会員の砕の最後の面会、軍司令部へ報告する電文も既に副官により印刷されてあるのに、今は此の離島に於ける悲壮な命令の模様を誰かに傳へる事が出来なくなつたのだ。勿論誰も知る筈もない。部隊長としては、覚悟として死を以て部下の冥福を祈り、遺族に傳へたかつたのであらう、砲声の中、此の最後の有様を上官に、遺族に傳へたかつたのであらう、砲声の間々たる壕の入口で見た安医に向ひ、最後の突撃後、若し生残れば、部隊長に戦闘経過を報告する極誠した。其夜見張兵は敵を発見して、直ちに「敵襲」の警報を発した。敵は下りて行つた。夜の戦闘は敵が固所なく打ち上げる照明弾により昼をあざ

むく奴である。敵砲弾が間断的に落ちし、その破片が気味悪いうなりを立てて落ちて来た。敵戦闘四日の夜は斯くて更けて行く。

二十日の朝は爽かな晴れ渡る朝であった。静かに目を閉じて耳を澄ませば小鳥の囀りが聞える。それは戦争前の平和な樹陰に戯れていた小鳥の声とも変らない。一瞬眼が戦闘の外にある様な錯覚に襲はれる。然し一度目を開いて見える風景は、何処が部落か何処が畑か見分ける事も出来ぬばかり荒果てて煙硝の臭ひは土に沁み込んでいた。

昨夜命令が発せられて、今日は西方に対しては一部の兵力のみを残し他は全力を挙げて攻撃する筈。敵山、墓地の線に向ふ事になった。壕中の速射砲も、蒲畑中隊指揮の野砲一門も今日は陣地から引出されて、南方、西方の敵に向けられた。今は敵機が敵上を低空しても誰も気にかけなかった。此の日敵も総力を挙げて攻撃し如山、墓地方面に強引な攻撃を加へ来たり、午前既に攻撃地に戦車及び

砲を並べ、我方に狙ひ射ちを加へて来た。敵の砲列から出る火がすぐ目の前に見える。

二中隊長大崎中尉（宮崎県）は昨夜徹宵で陣地の整備と兵の区処を行っていたが、此の朝陣容を行っている兵士に「今日が最後ですね、よく今日迄頑張りましたね」と静かに語りながら壕を出て行った。児島小尉（鹿児島県）もその家和な童顔を流石に緊張させながら「班長行かうぜ」と言って、弾雨の中へ進んで行った。

今や戦線は今朝に、敵機は低空しても撃たない、唯戦車砲が無茶苦茶に撃つ。既に友軍の弾薬は各隊共に欠乏してゐた、手榴弾も多くは残って居なかった。二中隊指揮班員を提げて突撃戦中、正午頃敵弾を受けて戦死した。最後迄その陣地を死守してゐた三中隊、稲垣少尉、浜田雅尉、津曲軍長等も砲弾を浴びて悲壮な最期を遂げた。永徳少尉、堂園少尉の戦死の話も傳へられた。墓地陣地

北側を迂して城山へ墓進する戦車群を側面より攻撃して遂に高野少尉の中隊になる胸部に敵の機銃弾が命中して、少尉は空を仰ぎ、華々しく最後を遂げた。見島中尉も敵弾を受けて重傷した。午後からは敵は西方からも攻撃して来た。之を撃退して草牧中尉（大分縣別府市）以下の一中隊と独機、独速の兵は必死に防戦した。独速山下少尉は銃眼より飛来した戦車砲弾を頭部に受けて即死した、同じく向山准尉も路上に於て敵弾の為に散った。下士官も兵も次々に撃たれて行った。我軍血みどろの白兵戦のうちに日は漸く西に傾きかけた。敵戦車群の取巻く鉄環は此時既に城山を取囲む直径約三百米の円周をなしてゐた。

夕方五時頃右手に抜刀の軍力を提げ、左手に拳銃を持った師団少尉（鹿児島縣）が十七名の兵隊を連れて二中隊陣地に迫って来た。「三中隊は全部でもう元丈けです、重傷を受けた部下に代かれて、到る此の拳銃で殺して来ました。敵を殺す積りで持って

て来た拳銃で先に自分の可愛い部下を殺さねばならぬとは……」と暗然たる顔をして児玉医に話しかけた。

其夜七時頃戦闘指揮所より僚隊が各隊に定った

「敵上陸以来既に五日間、我が将兵は優秀装備を誇る十倍に余る敵軍を邀へて勇戦敢闘、敵に多大の損害を與へたるも、我も亦将兵相次ぎて斃れ、弾薬又欠乏を告ぐるに到り、茲に於て我は残存せる全兵力を以て、今夜半を期し敵に最後の鉄槌を加へんとす……」

且時後の突撃令である。「兵は傷ついた足を引きづり、戦友にすがりつつ攻撃準備地点に向った。」

夜の暗闇を利用して突撃に加はり得た者は将校約十名、兵百五十を出なかった。此の狭少な地域に集中する敵砲弾の雨の行動が阻害されて、全滅を覚悟したのは二十日午後四時三時を過ぎて居た。井川部隊長を諸江大尉の指揮する主力三隊は此の頃は多数戦友の血を吸ったる様

高地方面を攻撃して夜の白い合戦をせんとし、草牧分隊以下二中隊を指揮し、飛行指方面に夫に斬込みを敢行した。

此の夜敵の戦車は暴雨より引き続いて城山を取巻き、弾に城山東麓に降かる戦車より射出す機関銃及び戦車砲は城山の東斜面と南斜面を吹雪の如く吹き掃ってゐた。指揮班員を率ひて壕を出た中隊長吉岡中尉は此の弾雨の為めに斃れた。その外中隊の将兵の多数が此の弾に無念にも倒れき、又は戦死した。

夜明け頃城山の北側一帯には前後の激闘が展開された。敵戦車より放つ榴弾砲と味方の小銃弾が錯綜した。敵は此の線に戦車の列を敷いて居た。その嵐の如く吹き荒る弾雨の為め、味方は次々に斃れた。井川部隊長も遂に前面に於て敵弾を左上膊、左胸部に受け、最早是迄と持ち合せ拳銃により従容として見事に自決を遂げられた。飛行指方面に向った草牧中尉もその

夜の突撃に散った。既に何時しか夜が明けて、敵は高地を組む塹壕ちもって来た。生き残った傷の者は止むなく各所の壕に入って夜を待った。

斯くて指揮官を失ひ、戦友を別れたい数の下士官兵は、其後動人完、書は壕に潜んで、夜になれば出て敵陣に斬込みを加へた。「日も長く敵の伊江島完全占領を妨害し、一人でも多くの敵兵を斃せ」との部隊長の訓示に生きて、飢えに堪へ、渇に苦しみ、痛みをこらへて、挺身戦は高長く繰り広げられたのであった。

注記

米誌「イヴニング・デイリー・ニュース」昭和三年九月三日号 より

伊江島は硫黄島に次ぐ難しい島の様であった。琉球列島に関する戦況報告は沖縄本島にのみ集中されるが、伊江島攻略はその困難さにおいて他の二つの島、即ち「カヤレン」島及び硫黄島に於ける血腥い戦闘と類を同じくするものであった。ニューヨークの誇り第七十七師団は五日間に亦なる手強い戦闘の後伊江島を攻略した。伊江島攻略は日本本土侵攻の際の空より の路を拓く点に於て重要であった。伊江島占領に於ける最大の困難は伊江城山の攻略にあった。報告者は此の山を地獄の岡と呼んだ。此の山は海抜六〇〇呎、コンクリート(珊瑚礁)の岩々の部落の背後に聳え、三辺の十分の之れを取囲み、全山が砲座と変ずるに至った。全部が如何に隠匿により塗装されて堅固な要塞を形成し、此処に信じ難き五千の日本兵が據った。伊江島は東西三哩、南北三哩半、硫黄島より極小さく、その半分は硫黄島と同様に堅固であった。そして硫黄島攻略には三ヶ師団が上陸したが、伊江島には一ヶ師団がその

攻略に従事した。

チャールス・ブルース小将の率いる第七十七師団は俊敏な日本海軍と相対した。日本兵はあらゆる物を欺瞞した。九月の間完全に隠蔽されていた。そして吾々七十七師団は拠点を取り入れるのに困難した。組織は島の西部に於てはわざと弱い抵抗を示した。それで吾々は西海岸を果敢して、伊江城山周辺に備へられたる敵の牙城へ嵐の如く進んだ。

吾々七十七師団は盲目的な無謀な攻撃はしなかった。四月十五日上陸、十六日朝飛行場を攻略し、注意深く進んだ。そしてその午後、城山の敵の虎穴へ進んだのである。斯くて瞬時にして血みどろな闘争が展開された。日本軍はその飽設陣地より七十七師団の喉元を見下して、其処へ弾雨を注いで来た。然しながら日本軍は充分な武器弾薬を持つてゐなかった。四月三十日我々は伊江島を占領した。然しながら戦闘が完了して終結したのではない。分散的な遊撃戦は其後も続いて行った。